
丸 山 美 由 紀

立山国際ホテル・スターライトスクウェア/2006年10月29日

出産・育児からのカムバック、演奏することの喜びに満ちて。ショパンの「雨だれ」、「バラード3番」、暗澹たる絶望や青年を湖に引き込むコワイ話の筈なのに。ウキウキワクワク、歌うような嬉しそうな息遣いが随所に、残虐性を面白がるコワイ性格をも持ち合わせるかと見紛う程。リサイタルとは自分の思いを人に伝える機会、今まで習得したモノ、これまでの人生で得た経験、自分が見出した小さな発見、編み出した音の響き、それらを音に託す、その時点での集大成。コダワリの自己表現、自分なりオリジナリティ。人に知って欲しい、成果を意識して背中に走る快感、聴き手の存在あって初めて成立。練習のプロセスでは得られぬモノ、発展途上の培いフェイズ、酸素不足で着火せず。幸せそうな満足感や陶酔感、そんな演奏家の性（さが）を目の当りにし心とむ。

ラヴェルの「水の戯れ」。会場はホテルの教会、結婚式場でのリサイタル。ピアノの共鳴板を閉じて、建物全体に散りばめられる音の響き、水の粒、キラキラ彩り鮮やか光の輝き。ホール自体が音楽の噴水との一体感、真正面から相對峙し眺めるスタンス、オーソドックス。されど、あくまでも今日だけのアプローチ。ところ変われば、ケースバイケース、フレキシブルなクレバーさ。視点の左右前後の移動、中心からの見渡し、鳥瞰ズームアップなど、異なる切り口の別ニュアンスの音楽かも。容易く対応可能、そんな資質の持主だったコトも思い出す。

リストの「オーベルマンの谷」、演奏前にピアニストの説明付き、オーベルマンさんとは気弱な若者とのこと。ずーと、「世界の中心で愛を叫ぶ」的なクライマックスの絶叫、それに至るプロセス描写、曲想からそんなイメージを描いていた、そのクリア化。迷いと悩みのツブヤキから、一人芝居か朗読の冴え渡るパフォーマンスまで、紆余曲折の経過を丹念に入念に解明、メッセージ含みの饒舌、朗々と高らかに。大スペクタクルのドラマチックな盛り上げ、一心不乱の入魂演奏、されどロマンシズムに溺れるコトなく、すべてコントロール下、適切な技術のフォロー、ノープロブレム。達成感に充実感、コチラもプラスアルファ、レベルアップ。

心待ちの復帰、感性に裏打ちされた素適な工夫は健在。音楽の諸々を教えてくれる信頼できるピアニストが近くにいることを衷心から嬉しく思う。今回は近しい人だけのプライベート・サロン・コンサート。来年7月には県内でリサイタル予定とのこと、ちょっと先のことだが楽しみである。（2006.11.3）

ショパン：前奏曲 変ニ短調 Op.28-15「雨だれ」
ショパン：バラード 3 番 変イ長調 Op.47
ラヴェル：水の戯れ
ラフマニノフ：練習曲「音の絵」ハ長調 Op.33-2
ショパン：ノックターン 1 番 変ロ短調 Op.9-1
リスト：巡礼の年 1 年「スイス」から第 6 曲「オーベルマンの谷」
